

「武家屋敷」創建時の姿を探る

足立 正智

はじめに

松江には江戸時代の武士の屋敷がいくつか現存しているが、いずれも詳細な調査がなされておらず、記録も少ない。ここで取り上げる「武家屋敷」と呼ばれている建物は、北堀町の塩見縄手と呼ばれる通りに面した、松江藩中級藩士の屋敷である。武士の屋敷は藩から貸し与えられるものであり、居住者はかなりの頻度で変わっていくことが多い。この武家屋敷においても居住者は変遷しているが、一時期塩見氏の居宅であった。塩見氏は異例の昇進を果たしたため、それを称え塩見縄手と呼ぶようになったと武家屋敷のパンフレットには記載されている。また同じパンフレットによれば、この屋敷は享保18(1733)年の大火の後再建されたものだとも記載している。それが真実とするならば2012年の今から見れば、279年前の建築ということになる。

屋敷は文政8年—嘉永4年の絵図（松江城下町絵図〈松平期〉、桑原文庫）によれば氏家となっている。「松江藩列史録」によると文政～嘉永期の氏家家は9代目、氏家外衛550石取、番頭の身分と記載されている。最後は11代氏家保とあり、慶応2年までのことが記載されている。おそらく幕末までこの屋敷は氏家氏が居住していたものと思われる。明治維新後、所有が誰に移ったかは判然としないが、昭和43年に松江市が買収するときの所有者は滝川氏であった。松江市は買収後修理、復原工事を施し、武家屋敷として公開した。

平成24年、建物の傷みが進み、瓦がずれ、部分的な木材の腐朽も見られ、雨漏りも生じ始めたことから、部分的な調査を行った。まずは建物の概要をまとめるための調査であり、全体の詳細調査までは行えなかったが、主屋の部分的な改造の痕跡などが確認できた。他の部分についての詳細な調査が今後必要ではあるが、とりあえず分かったことなどと共に、松江における他の武士の屋敷も比較のため、ここに紹介してみる。

1. 武家屋敷の概要

1) 建造年代

屋根裏などの調査の結果、屋敷の建設年を示す棟札などは、発見できなかった。しかし、総じて部材などの損傷・腐朽はさほどひどい状態ではなく、構造部材の老朽化が進んでいるとは言えない状況であった。また、柱に背割り部分も散見されることから、建築後200年以内ではないかと予想される。

2) 敷地位置と住人の歴史

氏家家の敷地の位置は松江城の北側の堀を周回する道に面し、現在は塩見縄手とも呼ばれている。松江城の北側は石垣が構築されず、土の法面となっているため、樹木が茂っている状態だが、堀の幅はやや広い。堀尾氏が松江城を開いた当初、亀田山は氏家家背後の丘陵ともつながっていたと考えられている。堀尾氏はこの稜線を切り崩し、堀を作り、武家地を造成して現在の形に近いところまで、地形を変えていった。その造られた平坦地の一角に、この氏家家は位置する。並びの東側端部に道を挟んで「御小人方」と呼ばれる詰め所があり、それから東側は町人地となっている。

2. 身分と敷地

1) 氏家家の身分

「松江藩列史録」によると文政～嘉永期の氏家家は番頭格となっている。氏家家の東隣は増田家、5代目が450石、御使者などを勤めている。西隣が大石源内、7代目が天保3年で120石取り、剣術師として勤め、邸内に道場も構えていた。その他並びは後藤加兵衛、300石の御番頭。高木傳十郎、400石の番頭などがある。ほぼ中級から中の上クラスの身分の武士が、この地域には配されていたものと思われる。

2) 敷地の概要

この塩見縄手には6軒分の敷地が並んでいた。現在は近世の隣地境界線がそのままに残っているとは言えないであろうから、単純に6等分していくと1軒の敷地の広さは約500坪ほどになる。日本建築学会中国支部研究報告書第17号（平成4年3月）武家屋敷（城東・城西地区）の構成（和田嘉宥氏）によると、内中原町あたりに分布した武家地の敷地広さの平均よりは少し広いぐらいとなる。

敷地は前面道路から数段上がって造成され、石垣を組んで増水に配慮した高さとなっている。石垣を構成する石は大根島で産する島石と布石、敷石などに来待石が用いられている。間口は約23間、奥行きは平均で18間ほどになり、奥行きの浅い敷地となるのは、裏に山が迫っているためである。

3. 建物の概要

1) 配置（付図—1）

敷地内の建物は主屋の他に門長屋と休憩所、便所、お休み処、「どう」展示場などがある。主屋と長屋門を除いた建物は後世のものである。近世以来のものは主屋と門長屋とそれに続く塀のみと思われる。ただし塀については、作り直された可能性もある。

門長屋は南側の前面道路に面し、道路から数段上がって門をくぐる。門の位置は道路から見て長屋全体の左側に偏り、門の左は籠部屋のみがある。右側には8畳一間と6畳二間、叩き土間を持つ2畳の部屋がある（付図—8）。

主屋は門長屋から見て左側奥に位置する。前庭を斜めに横切るように入り玄関に至る。主屋の裏側は丘陵地になっているが、斜面を利用した池を持つ庭園が作られている。休憩所などの新しい建物は敷地の右側（東側）にある。

2) 主屋

昭和43年に松江市が個人から購入した後、44年には復原改修工事が施されている。工事の内容は後に付け加えられたとみられる便所の撤去、浴室の復原と現在は武者隠しと説明されている廊下部分が、押し入れであったのを廊下に改造しているところが間取りの改変であり、あとは建具の改修、取り替え、床・壁の補修が主なものである。北側の8畳間と家族の間と呼ばれる6畳の間は、現況の床脇の壁に建具があり、通行できたのを壁に変えている。

また昭和57年には雨漏りがひどくなり、屋根瓦の一部取替と基礎のコンクリートによる補強、小屋組みの改修を行っている。

3) 門長屋

昭和44年の改修の時は主屋の改修に関する記録のみが残っている。門長屋の改修は昭和62年度に行われているが、その内容については審らかにされていない。家屋台帳を写した図面があるが、主屋についてはかなり間取りに齟齬があるが大きさは正しい。しかし、長屋は奥行きが現況よりも1.5間ほど広くなっており、それからすると、その部分を撤去して現況の間取りになっているものと思われる。また、その図面には長屋は「中間部屋」及び「厩」と記載されている。現在もパンフレットには事務所と中間部屋からなるように紹介されている。

4) その他

主屋の東側に井戸が現存している。井側は来待石製であり、4本柱の屋根が架かっている。上屋の構造は比較的新しい時代のもと思われる。台所、あるいは浴室との関係から有りうる配置関係にあると思われるが、あったであろう側溝などは存在していない。

4. 今回の調査から分かったこと

1) 調査の概要

今回の調査では、正確な平面図、立面図、断面図の作成を主とし、改修の痕跡、床下、天井裏については主屋の西側端部のみについて行った。北東の角屋部分についても後補の改変があると予想されるが、十分な調査は行われていない。門長屋についても同様であるが、ホゾ穴、壁などの痕跡などは可視範囲においては調査した。しかし、その結果としての変遷の考察までには至っていない。

2) 主屋（付図—2）

当初から主屋の屋根の勾配が緩すぎる（付図—6 断面図に示す）ことは指摘され、それが原因で雨漏りが発生していることも予想されていた。今回屋根裏の調査を行って、主屋北側の屋根の一部が緩く架け替えられ、その結果、南側の屋根面と勾配が違う状況になっていたことが分かった。なぜ架け替えられたかと言うと、屋根を伸ばし、一部屋を増築するためであったと思われる。北西隅に位置する「家族の間」と呼ばれる部屋とその廻り縁については昭和の時期に増築されたものと考えられる。床下を見ると基礎は鉄筋コンクリート製になっている。当初、その部屋の部分は外部だったと考えられる。従って座敷10畳に付属する書院も外部に面していたものと言うことになる。屋根裏では元々あった母屋（モヤ）を上を持ち上げ、小屋束（コヤツカ）を継ぎ足した跡が残っていた。また、10畳の座敷はその他にも後補の改修とみられる部分が幾つかあった。そのうちの一つは縁側部分であり、大屋根の軒の出が異様に短いことや、大屋根の軒桁が通らないことも何らかの改変の跡であることが考えられる。もうひとつ問題となるのは「武者隠し」と現在呼ばれている廊下部分だが、家族の間の付け足しという事実から見て単なる廊下と縁側と思われる。現在の天井の約2尺上部に古い天井も発見された。昭和44年の修理以前には廊下は押入であった。押入を否定する根拠がなんであったのか、修理の報告書も存在しないのでよくわからない。北東奥の茶室や仏間がある部分についても屋根の納まりに無理があること（付図—5）、桁に切断の痕があることなどから、元々あった部分を排除し、新たに付け加えた可能性が高い。中級藩士である岩佐家は、現代で言う南田町のかって船付の松があったあたりに位置する。岩佐家の絵図から起こした間取り（付図—11）を見ると、武家屋敷と共通点もあり、今後の間取り復元の一助となるだろう。しかし、いずれにしろ当初の間取りを復元するにはさらに調査を行う必要がある。

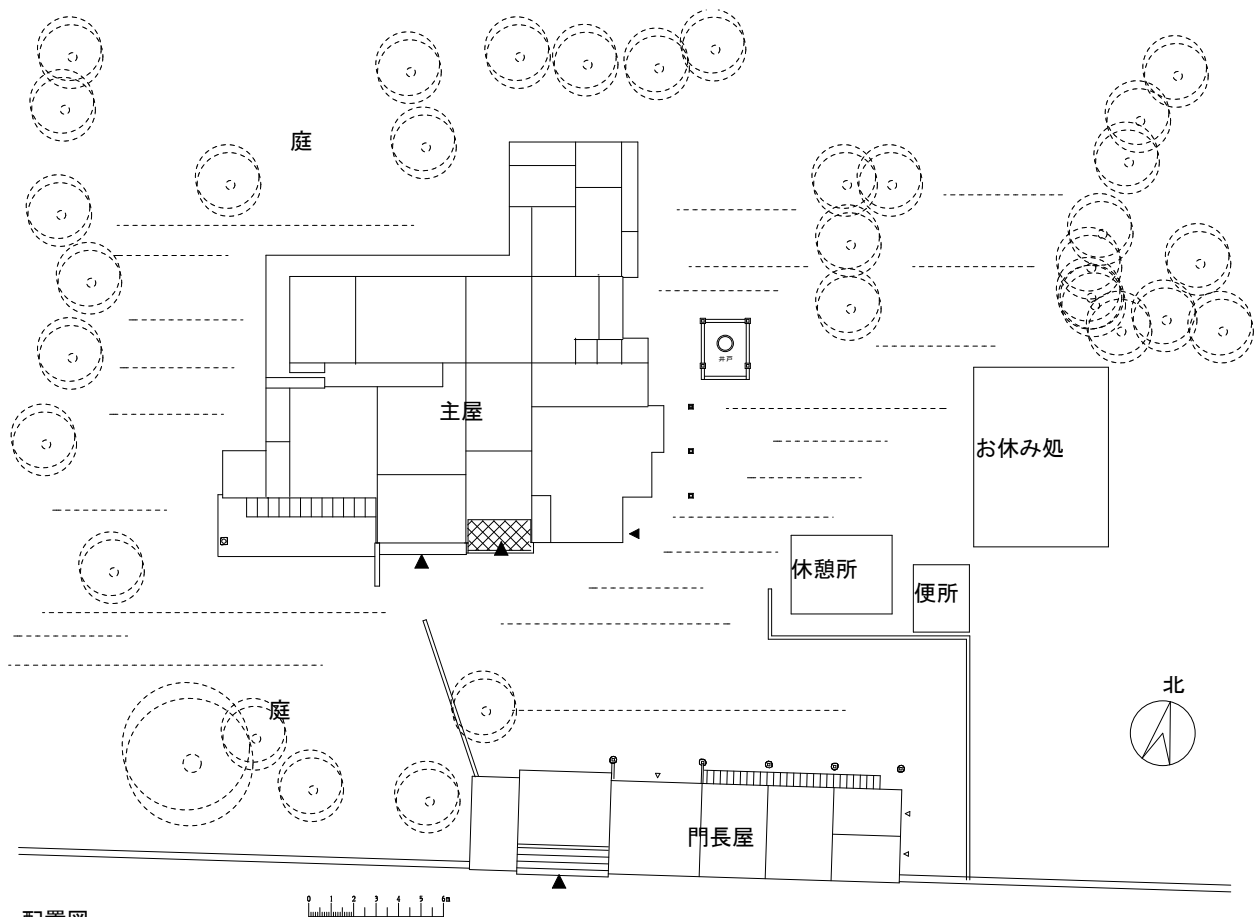
3) 門長屋（付図—8～10）

門長屋の建物は、これも調査の途中で分かったことしかないが、かなりの改修を重ねている。枘穴や鍵込みの痕跡は多く、古い材の使い回しも多くみられる。屋根の垂木も細く、土葺瓦屋根を支えられるような材ではない。後で垂木ごと取り換えられた可能性もある。このような長方形の形であったのかも今の段階では分からない。矩手に曲がっていたと思われる痕跡もあるし、実際修理前は北側に奥行きがあった。それは下屋根部分かもしれないが長方形の上屋だけではなかったかもしれない。岩佐家の絵図（付図—11）を見ても下屋と思われる部分が伸びている。いずれ構造材も含め詳細な調査が必要であろう。

5. 結びとして

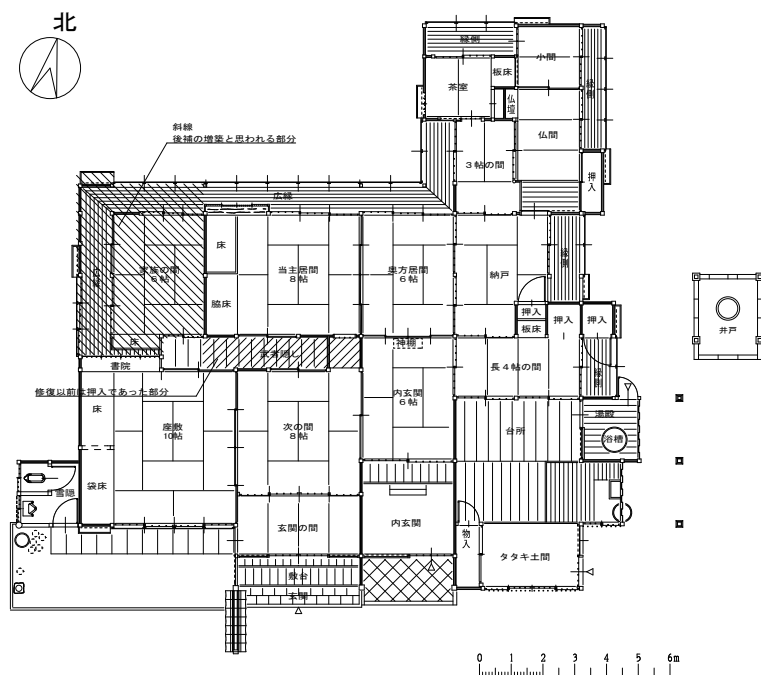
松江藩の藩士屋敷については、これまでに深く研究がなされていなかった。この武家屋敷あるいは

「ヘルン旧居」と呼ばれる旧根岸家などがあるが、他にも部分的には江戸時代に建てられたと思われるものもある。また、絵図面も新たに発見されたものもあり、それらも含め包括的な藩士屋敷の研究が進められるべきであろう。それによって近世の武家住居の姿が審らかにされていくことを期待している。



配置図

付図－1

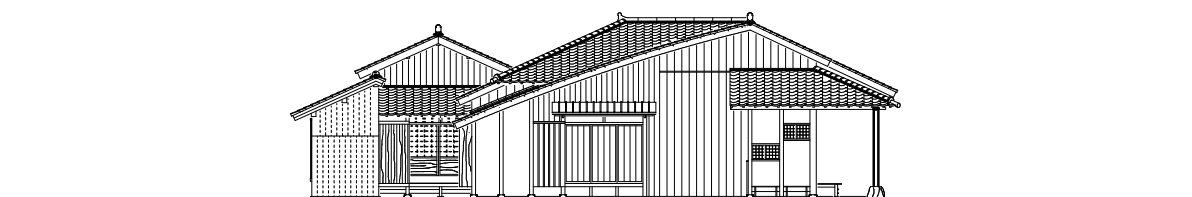


主屋平面図

付図－2



南 立面图

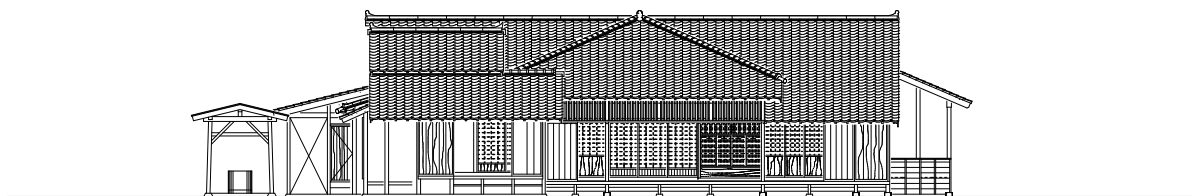


南北立面图

西 立面图



付图—3

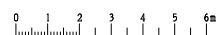


北 立面图

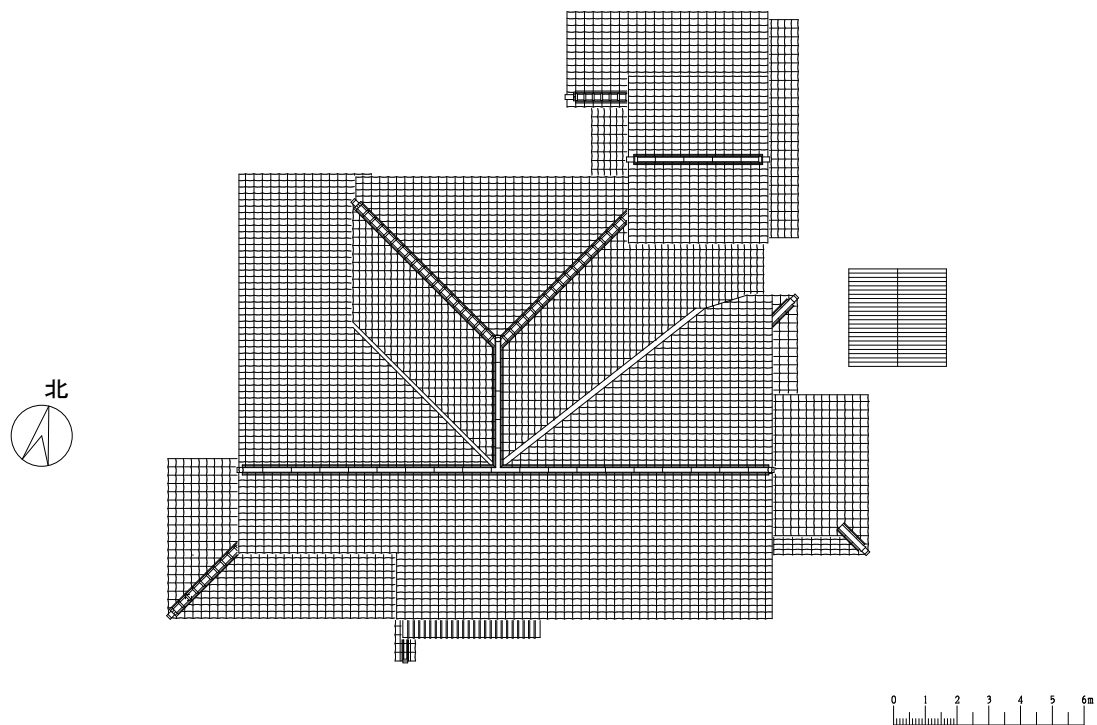


北面東面立面图

東 立面图

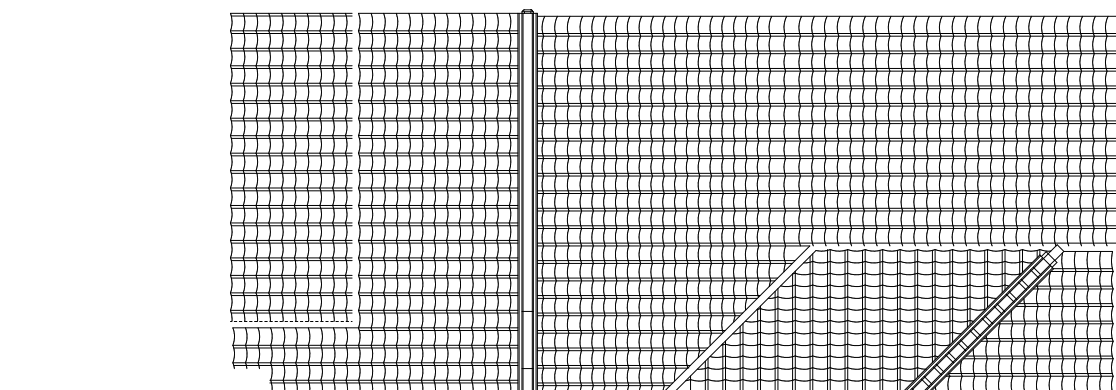
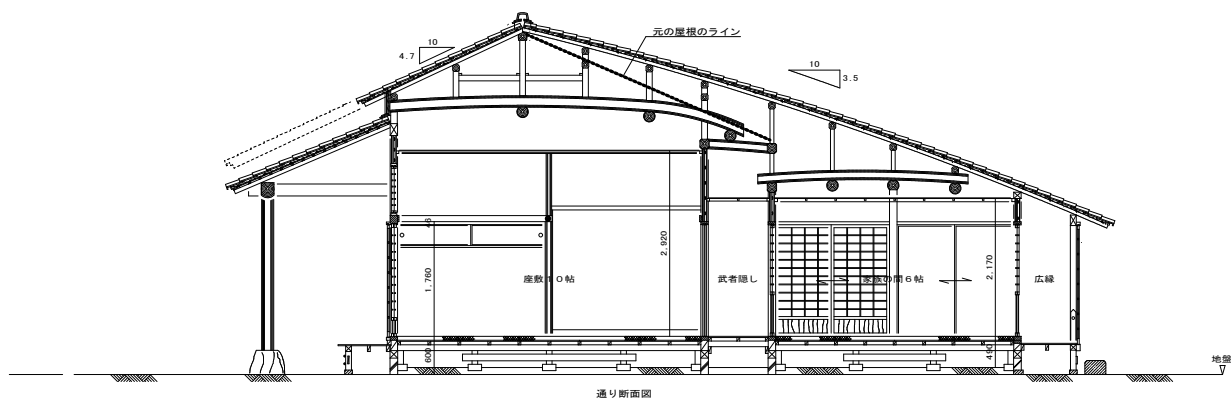


付图—4



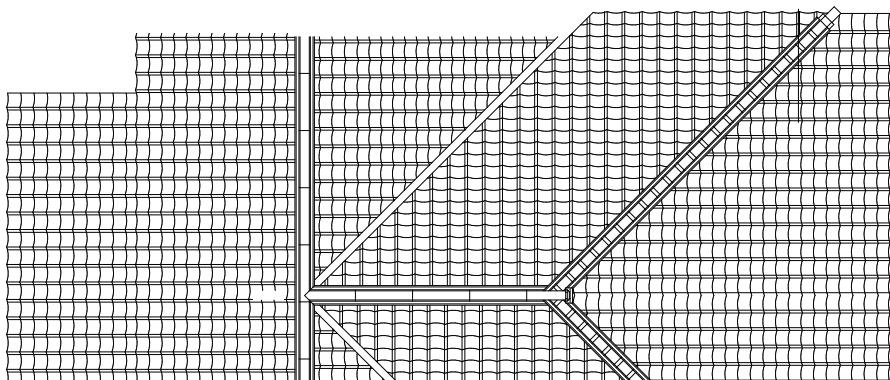
屋根伏図

付図－５



主屋断面図(座敷 1 〇畳、家族の間)

付図－６



Architectural floor plan of the first floor of the 'Wakayama House' (和歌山邸). The plan shows a layout with various rooms including a '露部座' (Open-air seating area), '客一室' (Guest room 1), '事務室' (Office), '和室6帖' (Washitsu 6-mat), '土間' (Dirt floor), and 'タタミ' (Tatami). Dimensions are provided for each section: 1.968, 1.066, 1.898, 1.265, 4.229, 3.975, 2.943, 2.934, 2.958, and a total of 19.007. The plan also indicates '武家屋敷出入口' (Samurai residence entrance/exit) and '露部座' (Open-air seating area).

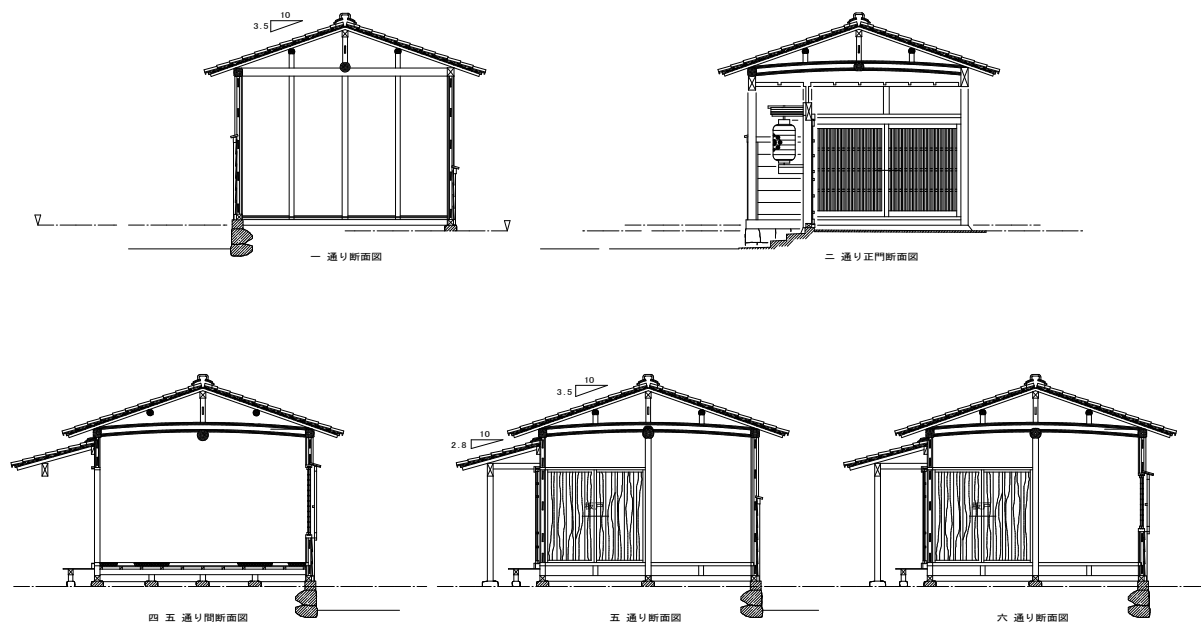


(52)



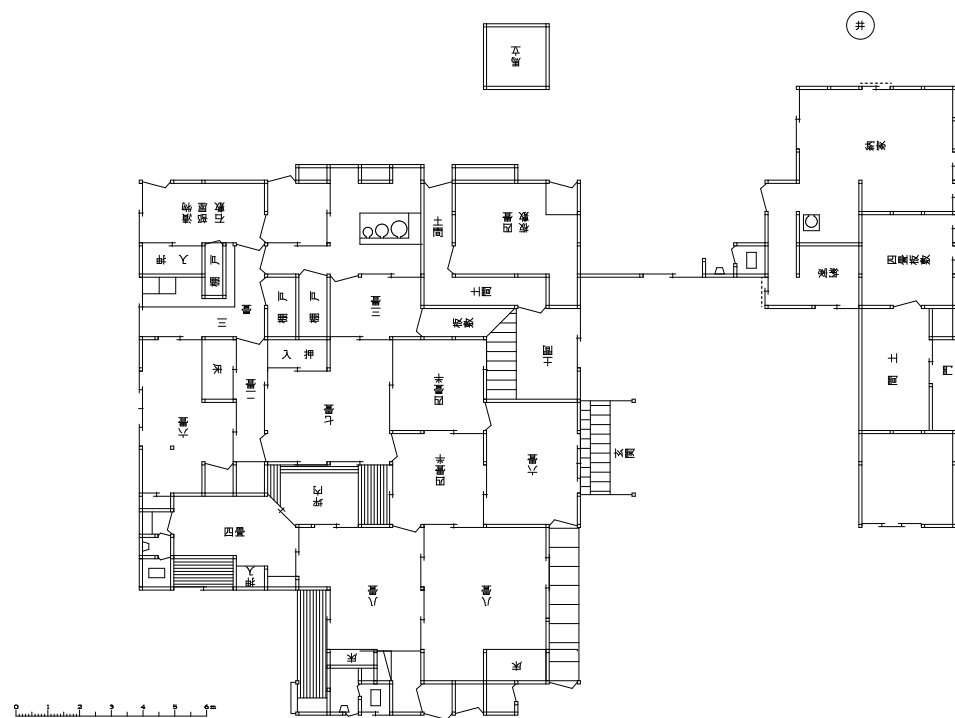
長屋門立面図

付図－9



長屋門断面図

付図－10



岩佐家平面图

付図-11